

看護倫理カンファレンスを導入しての 看護スタッフの意識の変化

医療法人社団五稜会病院

齋藤 恭央 星野 美栄子 鈴木 大輔
吉野 賀寿美 中島 公博

I.はじめに

精神科看護を実践するなか、患者の安全確保のために患者の行動を制限することや、一方で本人の希望を尊重することで反対に患者を危険に晒す場面に遭遇することがあり、その度にスタッフが漠然とした葛藤や不全感を感じていた。そのため看護倫理の原則から事例を検討する**倫理カンファレンス**を導入し、倫理的側面から問題の解決策や最善の実践方法を見出す取り組みを行ってきた。その結果、スタッフ間でケアに対しての意識変化があったことが明らかになった。

II.研究目的

倫理カンファレンスに対するスタッフの思いを明らかにし、カンファレンスの効果を検討する。

III.カンファレンスの方法

事例（気になっている出来事や一連の過程）

Aさん

入院数日後より徐々に混乱が増し、疎通不良、洗剤を飲む、異食などの行動があり、保護室での隔離が開始。入室後も疎通不良で衣類をトイレに浸す行動などが目立ち言語的介入を試みるも行動変容は望めない状態であった。

看護師の悩み

衣類を浸す行動が一日に何度もあり、全身濡れた状態で経過することも続いていた。頻発する際は一時的にはあるが病衣を入れるのをやめ、室内暖房をつけて様子観察。行動化がなければ衣類を入れるといった対応を行っていた。しかし、一時的とはいえ下着だけ着用している状態で、安全、衛生を優先し、羞恥心への配慮ができていなかった。混乱しているとはいえそれでよかったのか。

自尊心原則 善行原則 無危害原則 正義原則 誠実 忠誠

看護倫理原則にそって、事例検討

- ・現状で羞恥心を感じるか疑問があるが、症状が安定し振り返った時の精神的ショックを考えるとその点の配慮も必要であった。
- ・スクリーンが必要だったのでは。羞恥心があるかどうか以前に常にそれに配慮した対応が必要。
- ・自尊心をもっと引き出すような関わりの実践をする、そうすれば必然的に支援、援助への自信が持てる。

IV.研究方法

- 1.対象：当院急性期治療病棟に勤務する19名の看護師
- 2.調査期間：201X年3月～8月
- 3.倫理的配慮：研究参加は自由で、参加不参加により生じないこと、情報の漏洩防止とプライバシーの保護に遵守することを口頭で説明し、同意を得た。
- 4.調査方法：倫理カンファレンスに関する自記式アンケート調査の結果を基に半構造化面接を実施。
- 5.データ分析方法：面接内容から倫理カンファレンスに関して語られた内容をコード化し、意味内容の類似性に基づき分類。分類したものを抽象化し、ネーミングした。尚、本研究の分析の妥当性を高めるため、質的研究者によるスーパービジョンを受けた。

V.結果

スタッフの倫理カンファレンスに対しての思い

- ①カンファレンスで得られる学びと自己成長
カンファレンスから「自己の振り返り」や「他者からの学び」の機会を得て「解決の手立て」となっている。
- ②カンファレンスの在り方
「テーマの選択方法」や「参加者による理解の違い」はカンファレンスの内容やディベートの活発さに影響している。また、時に「思い出したくない事例に向き合う辛さ」を感じるスタッフも少数であるがいた。
- ③知識と教育としての倫理原則
「倫理に関する知識不足」による考え方の難しさを感じたり、そのための学習の必要性や新人教育に有効などの「教育的ツール」として、倫理原則の活用を認識。

テーマ	サブテーマ	データの例
カンファレンスで得られる学びと自己成長	自己の振り返り	看護を行う上で常に倫理を意識するようになった。人としての尊厳を考えるようになった。業務の中で置き去りにしていた倫理的視点について考える機会になった。
	他者からの学び	共有することで今まで倫理的な視点で看護できていなかったことの気づきがあり、看護の視野が広がった。色々なスタッフの意見、倫理観、看護観を共有する機会になった。
	解決の手立て	自分の悩んでいる事例を取り上げてもらえてとても救われた。陰性感情など様々なジレンマが生じる場面に倫理的側面から考えられるのはいい。
カンファレンスの在り方	思い出したくない事例に向き合う辛さ	敬力など思い出したくない事例に向き合うのは辛かった。
	テーマの選択方法	どのまま実践できるタイムリーな内容ならいい。当院の事例だけでなく外部の問題事例を用い話し合えたのはさらに視野を広げた。
	参加者による理解の違い	結論ありきではないため、どこで折り合いをつけるか悩んだ。スタッフによって倫理への認識の差がある。ファシリテーター出来る熟練したスタッフが必要。
知識と教育としての倫理原則	倫理に関する知識不足	倫理原則が難しいし、わからぬし、もどわりやすい表現があればいい。倫理原則に無理に当てはめるのは違和感がある時がある。倫理に関する学習会を開いてほしい。
	教育的ツールとしての倫理	ベテランは新人がどこで悩んでいるか指標になる。看護教育にも活用したい。

VI. 考察

従来の有効な看護ケアを導き出すカンファレンスとは異なる倫理カンファレンスを導入したことによって、それまで漠然としていた理由について考える機会となり、自身の看護実践の振り返りや新たな「学びや自己成長」を得る機会につながったことや「知識と教育」として有効なツールとなったことがインタビューから示唆された。

また「カンファレンスの在り方」においては外部の事例を用い、カンファレンスを行うことで更に倫理的な視野が広がったとの意見があった。事例ケース以外にも自由なテーマで行うことで更に有効になると考える。

同時に、倫理や倫理原則に対し、「難しい」「違和感がある」という意見もあり、苦手意識や嫌悪感を感じるなど倫理に関する知識不足があることが示され、倫理に関する学習会の必要性やファシリテーターの育成が課題となることも明らかになった。

VII. 結論

1. 倫理カンファレンスを導入することにより、看護師の学びと自己成長を促すことができる可能性がある
2. テーマの工夫により更に倫理的な学びを深めることができる
3. 教育としても倫理原則カンファレンスが有効なツールとなる可能性がある
4. 今後の課題として、倫理に関する知識不足に対し学習会の開催、ファシリテーターの育成、院内教育の導入

参考文献

- 1) 瀧本 雅昭, 神田 直樹: カンファレンスで根付かせる看護倫理 現場導入の仕方, 日経研出版, 2012
- 2) 高田 早苗: 平成15年版看護白書, 日本看護協会出版会, 2003
- 3) 坂田 三允他: 精神看護と法・倫理, 中山書店, 2006
- 4) 日本看護協会: 倫理原則, <http://www.nurse.or.jp/rinri/basis/rule/>